大学

大正大に「デジタル文化財情報学科」

情報技術も文化財も 専門知識の融合と実践



村上教授（左）の講義を聞く学生たち

デジタル技術を活用しながら貴重な文化財や自然遺産を保存・活用する人材の育成も急務だ。大正大（東京都豊島区）は今春、「デジタル文化財情報学科」を新設した。

新学科の学生は、多様な文化財情報をデジタル化する情報技術をベースに、歴史資料や自然遺産などに関する知識と、その魅力を伝えるための方法を学ぶ。講義では、プログラミングやAIなどを網羅的に学び、建造物の修復へのAI活用、文化財の3Dモデル作成、自然遺産のデジタル定点観測といった実践的な技術を習得する。

新学科設立の背景には、博物館など文化財保護の現場で、文化財と情報技術の両分野に専門知識を持つ人材が不足している点がある。文理融合による多彩なカリキュラムを通じ、継承・保存を第一義としつつ、地域創生や持続可能な観光などへの貢献を目指す。卒業後は、博物館や美術館などの学芸員に加え、自治体の文化・教育・観光部門など多様な進路を想定する。

9月下旬、同学科の講義で、村上隆教授（歴史材料科学）が今春入学の1期生に対し、「心のインフラ」としての文化財や自然遺産の重要性を訴えた。村上教授は京都美術工芸大教授や京都国立博物館学芸部長などを務めた経験があり、両分野の専門知識を持つ。

「肉眼では見えない情報を把握する『デジタルの眼』は、文化財の部分でもますます必要となる。自然遺産や未指定文化財も含めた文化財保護のあり方を皆さんと一緒に探求していきたい」と語った。